

『地獄の特訓と通過儀礼とピカソ』の関係

テクア期待の新人、小菅君がかの有名な『富士の地獄の特訓』から帰ってきました。

『どうだった？』『いや～楽しかったです！！』『よし！じゃあもう一回行か！！』

『あ、いや、遠慮しときます(汗笑)・・・』

行く前は不安一色の世界に閉じこもっていた感じでしたが、帰ってきた小菅君は自分の頭から生まれて初めて少し抜け出すことができたような爽快感と笑顔にあふれていました。そんな笑顔をニコニコして眺めていると『社長、研修好きだね～！』とよく冷やかされるのですが、研修、訓練、100キロウオークなどは、むかしは親や地域が遊びや習わしとして実施していた『勇気を出し、共に助け合って、自分を乗り越える』という体験を、そういう風習が廃れ、偏差値ですべてが決まっていく教育システムの時間の中では、企業経営者が引き継ぎ代行していくしかないという現状を表しているのではないかと思います。

みなさんは子供のころ、夏の暑い日に川に遊びに行き、滝壺に飛び込んだりした経験はなかったでしょうか？飛び込む前は滝壺まで異常に深く思えて、ちょっとでも足を滑らせると岩肌に接触するような気がして、いろいろ考えがぐるぐる回ってなかなか飛び込めないもので、先に飛び込んでるヤツらが川の中からそれを見ながら笑っていて、自分も何とか恐怖を乗り越えて飛び込んだらめっちゃくちゃ爽快で、今度は次のモジモジ君を川の中から笑っている(笑)。

そんなお決まりの行事。教育ママ的に冷めた目で見ると危険で全くバカバカしい子供の遊びなのですが、こういう経験を全くしないで大人になることで大量の理屈人間を社会に送り出していると思います。

その証拠に世界中の通過儀礼はだいたい理屈が通用しない無茶苦茶なものが多いです。それはなぜか？たぶん『理屈』の反対語が『勇気』だからだと思います。

『理屈を超えたところからしか勇気は得られない。勇気を出した経験の自信からしか再び勇気は絞り出せない』これは真実だと思います。

パプアニューギニアの若者はほとんど道具を使わずにサメを捕まえて来ます。

マサイ族の若者はヤギを抱えて一人でサバンナに出かけ、これを餌にしてライオンを仕留めてきます。

バヌアツの若者は言わずと知れた本家バンジージャンプ体験者です。これら世界の通過儀礼を今後テクアとしては研修に採用していきたい。なんてことは全く思っておりませんし、まず自分がやってみるというスタイルなので命が持ちません(笑)。

しかし、『人は変われる』という思いを大切に、内向的な現代の若者たちを勇気と思いやりのある職人軍団に育て上げていくために、不安全な冒険を安全な範囲内で疑似体験させ、無理をするなど言いながらもうちょこっと頑張れ！と言い続けていきたいと思っています。

大好きな2枚の絵があります。ピカソの絵です。

2枚並べて同時に見るのが好きなんです。

↓この2枚の絵です。



この並列された2枚の絵から『人は変われる』という強烈なメッセージを受け取ることができるので大好きなんです。鬱屈とした繊細で不安な世界から、ゆったりとシンプルな思考で安定した世界。どちらもピカソの精神状態がそこに投影されていると思います。自分の思考から抜け出せず、鬱屈とした若者時代があったとしても、作業を通して、汗と油と粉じんにもみれながら一心不乱に体を動かし、いろんな試練に挑戦し、技術を磨き、顧客の信頼を得る。そのころには見える風景が違ってくる。解釈も違ってくる。表現方法も違ってくる。自分もそんな自己成長の発展途上で頑張ってます。

『倅せになろうよ♪～』ピカソの晩年の絵画は自分にいつもそう語りかけてくれているような気がします。

感謝！ 羽原篤史

